
愛ノ裏

デルタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛ノ裏

【Nコード】

N 6 4 7 5 S

【作者名】

デルタ

【あらすじ】

ある高校

矢吹京と秋山葵の高校生活と恋愛模様
しかしそれは長くは続かない・・・

始まり（前書き）

後半人によつては怖いかもしれませんが
最初はただの恋愛です
初投稿でちよつと厨二入つて痛いです

始まり

「ここは・・・？」

見知らぬ部屋

部屋というよりは「空間」と表現した方が適切かもしれない。
病院の廊下のような「空間」

あるものは天井の蛍光灯ぐらいで窓もドアも無い

無限に続くかと思うほど果てしない「空間」に俺は立っていた。

「俺は一体…」

パリンッ！

状況も掴む間も無く背後からガラスが割れるような音が響く。

「ッ！」

間髪入れずに次の音が鳴る

天井の蛍光灯が奥から割れて向かって来る。

「なんなんだ?!」

思う間も無く足が動く

ここに居てはいけない、ただそんな気がするなんてもんじゃ無い
第六感が危険信号を出している。

パリンッ！ パリンッ！ パリンッ！ パリンッ！…

後ろから迫る音

振り返らない、振り返りたく無い

「また、逃げるのか・・・？」

高校最初の日

長ったらしい入学式とは裏腹に、自分のクラスには活気が満ち溢れていた

窓際後ろの最高とも言えるポジションで、教室で騒ぐ男子共や

机を囲みくつちゃべってる女子共を遠目に眺めていた。

話しているのは地元の友達だろうが、俺の家は少し遠くにあるので話す相手も居なく完全にぼっちだ

やぶきけい
「矢吹京君・・・だよな？」

後ろから聞こえた声に振り向く

あきやまあい
「私隣の席の秋山葵仲良くしてね」

「・・・」

「無視ですか」

鬱陶しい

「京って女の子みたいな名前だね」

いくらぼっちでも鬱陶しい物は鬱陶しいな

「・・・他の女子達と一緒に居なくて良いのか？」

「うーん、ああ言うのあんま好きじゃないんだ」

「そうか・・・」

美しい顔、馴染み易い声、透きとおる様な白い肌
歳相応の背丈、細い手足、黒く長い髪を後ろで結んだ頭…
クラスの中心に居るような感じの人物だ。

思う様に話せないのは、俺が女に免疫がないためだろう。
その後も彼女はしょっちゅう俺に話かけてきた

鬱陶しいが、嫌いになれないタイプ

俺は徐々に彼女のペースにのまれていく。

「ねえ、放課後ヒマ？」

入学から一ヶ月

葵とも親しくなり他の生徒ともそこそこやってる。

葵は親しい友達、そんな認識だ

「いきなりなんだ？」

質問に質問で返す

「いや、チヨット付き合つて欲しいと言つか・・・」
どこかにでも行くつもりだろうか？

「まあ、暇だけど・・・」

「やった！じゃあ帰つたらポチ公前ね！」

ポチ公は近くの栄えてる街のシンボルだ

「放課後そのまま行けばいいじゃねえか」

「制服じゃ嫌なの！」

制服じゃ嫌なのか・・・

女つて物はよく分からね。

【ポチ公前】

遅いな・・・

世間の女という物は準備が遅いらしいが、どうもその意見には賛同せざるをえないな。

～15分後～

「おい！」

葵が叫ぶ

「よ、よお」

私服の葵が駆け寄る

そこにはミニスカートに肩の出た上着、ルーズソックスの葵がいた
まさに至福の私服・・・

「待った？」

「いいや、俺も今来たばかり」

嘘だ

「そつ、じゃあ行きますか」

葵が俺の手を引き歩き出す

「おう！」

・・・どこへ行くのだろうか？

【服屋】

「ねえねえ、これ可愛くなあい？」

「そうだなー」

「ちよつと！ちゃんと考えてる？」

お前が着ればなんでも可愛いよ・・・
な、何を考えてるんだ俺は！

【ゲームセンター】

ピロロロ！ピロロロ！ピロロロ！

「京い、あれ獲れる？」

「任せとけい！！」

ピロロロ！ピロロロ！ピロロロ！

「ダメじゃん」

「・・・」

【駅前】

「今日は楽しかったね！」

「・・・お前そんな薄着で寒く無いのか？」

「えへへ、ちよつぴり寒い」

「ばかやろ」

着ていた上着を葵に被せる

「あ・・・ありがとう」

「ねえ、目瞑って」

葵が言うか

「はあ？」

「いいから」

言われたとおり目を瞑る

くちびるに柔らかく温かい物が触れる

「お、おい！今ん「じゃあね、バイバイ」
いう前に葵は言ってしまった。

始まり（後書き）

そんなに長くは無いです

結末をバッドにするかグッドにするかまだ悩んでいます

中 加速する愛（前書き）

葵は京の事を良く知っている
教えてない事まで

そんな葵と京付き合いはじめる

葵の提案で一緒にK県に旅行に行く事になる

中 加速する愛

時は飛んで夏休み

ピピッ

クラスメイトからメールが来る

「お前秋山と付き合ってるんだって? (´ ˘ ˘ ˘) b」

「は? 誰に聴いたの?」

「やっぱりな (´ ー ˘) 気付かないと思ったの? 見れば分かるしクラスでも噂だぞ ^ ^ ;」

クラスで噂だったなんて・・・しかも見ただけで分かるほど・・・

「名前で呼び合うとかおかしいと思ったんだよ、まあこの夏休みはどこかに連れてってやって御幸せにな (^ - ^)」

御幸せて、結婚した訳じゃないんだが

そう言えばあいつ、いきなり名前で呼んで来たな・・・

他の生徒は苗字に、ちゃんやらくんで呼ぶのに・・・

「会った時に聞いてみるか」

「なあ」

「ふえ?」

寝そべりテレビを見ていた葵が振り返りこちらを向く

「どんだけ馴染んでんだよ! お前は俺の兄妹か!」

おもわずツッコんでしまう

まるで日常系アニメだ。

「で、何?」

「別に何でもねえよ」

「何、言いなよ」

「うるせえな! 何でもないつつてんだろ!」

しまった言い過ぎた。

葵はキヨトンとして居たがすぐに微笑み、俺が謝ろうとする前に話し始めた。

「じゃあコッチから話し始めたちゃうもんね」

「な」 「夏休みだし2人でどこか行こうよ」

話しの内容に驚きしばらく硬直してしまう。

「どこかつてどこだよ・・・って2人で？」

「えっと・・・K県」

K県？近くの県だ

それにはあちゃんの家が会った県。

2人で？という質問を無視された事は特に気にせず話を続ける。

「何でK県？」

「行きたいから、貯金ある？」

貯金は余るほどある

「日帰りだろ？別にそんなに金かからないだろ」

「いや、一泊するよ」

「は？未成年だけで泊まれるわけ無いだろ」

「予約の時に年齢を聞かれるわけじゃないし、押しかけちゃえば大丈夫」

「強引過ぎるだろ・・・ってもう予約したのか？」

「したよ」

「いつ？」

「来週」

そんないきなり言われても

その行動力はどこから来るのか・・・

「丁度来週だから準備してよね」

「・・・準備って何を？」

「適当にすればいいの、それよりおじさんおばさんは適当に誤魔化しといてね」

・・・まあ、友達の家泊まるとでも言っとくか

「一週間後」

「早く早く！電車行っちゃうよ！」

「はあはあはあ・・・」

いつもは遅いのになぜこういう時だけ早いのか・・・
そんなに急かさなくてもまだ電車は行きやしない

「ふう、間に合った」

「そんなにギリギリじゃないだろ」

ブルルルルル

『5番線ドアが閉まります、ご注意ください』
ガチャン！

「・・・お前が急かすから朝飯食べて無いんだけど」

「早起きすればよかったじゃない、お腹空いたの？」

「空いた」

「おにぎりあるよ」

「いたどころか」

葵からおにぎりを受け取る

その時の葵の顔は少し笑っていた。

頬張る

と同時に口の中に凶悪な酸性の味が広がり、俺のくちの中を侵食して行く。

そいつはさらに唾液の湧きを加速させ全体に拡散させる。

「ぐっ、こいつは・・・」

「梅干し、嫌いだよね」

「お前・・・分かってて・・・」

「アハハハッ」

クソ・・・やられたね。

・・・何でこいつは俺が梅干し嫌いなことしてるんだ？

一通り見終わった後。

「行きたい所はこれで全部か？」

「いや、まだあるけど今日はもうホテルに行っちゃおう」

「予約した秋山です」

「はい秋山様ですね、お待ちしております。205号室です」

ホテルの受付の人に鍵を渡される。

ホテルと言ってもそこまで大きくなく4階までしかない。

ガチャ

部屋のドアを開ける。

「ああ、疲れた」

葵が部屋の中に走りソファに腰を下ろす

「飯はどうする？」

「別にお腹空いてないからいいや」

「そうか・・・じゃあお前大浴場行ってこいよ、たしか今女湯の時間だから」

「京は？」

「部屋の風呂入るよ」

「そう、じゃあ行ってくる」と、言い葵が部屋から出る。

俺も風呂に入るか。

・・・

「ふゝ、サッパリ」と、言いながら葵が部屋に戻ってくる。

「遅かったな」

「京が早いだけじゃないの？」

「そうか？お前が行ってから一時間半経つぞ」

「大きいお風呂だからそれくらい時間かかるでしょ。何で？」

「いや、ちよつと腹減った」

葵は要らないと言ったが、さっきから小腹がすいてる

「なら、おにぎりあるよ」

おにぎりと聞いた途端に、あの嫌な記憶が蘇る。

「そう言えばお前！朝はよくも・・・」

「フツ、つかまえてごらん」

と言い、葵が逃げる

「あ、待てこら！」

「鬼さんこちら」

意外と足が速い。

・・・

「やっと捕まえた！」

「・・・で、どうするの？」

「え？」

「何も考えないで追いかけてたの？」

「・・・」

「ふうん、じゃあ・・・」

葵の冷んやりとした手が俺の首に回され、甘美な唇が俺に迫る。

・・・

「続きは・・・？」

中 加速する愛（後書き）

投稿が遅れました

次で終わりですがここまで見てくれた方、見苦しいと思いますがよかったです。見てやって下さい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6475s/>

愛ノ裏

2011年10月9日00時28分発行